

## 井口省吾陸軍第15師団長の豊橋における行動空間

藤 田 佳 久

### 1. はじめに

本稿は、1908年（明治41年）に愛知県渥美郡高師村（現在豊橋市）に設けられた豊橋の陸軍第15師団長のうち、2代目として1912年（大正元年）11月27日から1915年（大正4年）1月25日までの2年あまり在任した井口省吾師団長の地元豊橋を中心とした在任中の行動空間を在任中の日記から明らかにしようとするところに目的がある。

豊橋に設けられた陸軍第15師団は、その設置期間の1912年から軍縮によって廃止される1925年までの約15年間に7人の師団長が就任した。すなわち、初代の内山小二郎（1909年1月14日～1912年1月27日）、2代目井口省吾、3代目由比光衛（1915年1月25日～1917年8月6日）、4代目久邇宮邦彦王（1917年8月6～1918年8月9日）、5代目尾野実信（1918年8月9日～1919年11月25日）、6代目市川堅太郎（1919年11月25日～1922年8月15日）、7代目田中国重（1922年8月15日～1925年5月1日）である。そのうち4代目の久邇宮邦彦王はこの15師団初めての皇族に師団長として赴任し、在任中、長女良子様がのちの昭和天皇の妃として内定するというビッグニュースがあり、豊橋全体が湧いたという出来事もあった。

この第15師団の廃止されたあと、1927年からは陸軍教導学校となり8人の校長が在任

し、さらに1914年には陸軍予備士官学校となり、3人の校長が在任した。そしてこのキャンパスは敗戦により、1945年に閉じられ、戦後は愛知大学や時習館高校、豊橋工業高校、中学校、小学校などの文教地区へと姿を変えた。

このような経過の中で、豊橋の高師原一帯に順次展開した3つの軍事組織と訓練学校は合計18人の師団長と学校長が着任したが、戦後これらの組織や学校が公式に残した記録がその断片を留めたに過ぎず、どのような師団であり学校であったかはあまり知られていない。

そのような中で、2代目井口省吾師団長については、この師団長時代のみならずベルリン留学中や日露戦争時以来の日記を記録しており、豊橋での第15師団長時代の日記も残している。日記は私的な記録であるが、その中には公務の記録も含まれており、『近衛篤磨日記』<sup>(1)</sup>を彷彿とさせるものがある。

この私的記録と公務記録を含んだ日記は、井口省吾師団長の師団長としての仕事のみならず、在任中の豊橋における地元とのつながりも記録され、師団長の考えや行動を通して15師団と地元の地域とのかかわりをうかがい知ることができる。その点で戦前における軍隊と地域社会や経済との直接的なつながりの状況を知ることができ、大変貴重な記録であるといえる。

なお、井口省吾師団長の出身地である沼津市では、地元の先覚者の足跡をたどるべく井口省吾の日記を拝読する勉強会が組織されており、<sup>(2)</sup> 本稿で扱う日記はこの研究会が拝読した成果の一部を利用させていただいた。

## 2. 井口省吾の軌跡

井口省吾の豊橋時代の日記を扱う前に、まず井口省吾自身の軌跡を簡潔にみでみる。

幸いにも、井口省吾は多くの日記を記録しそれらが残されたため、その研究グループ<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup> や研究者<sup>(5)</sup> がそれぞれの部分で井口省吾の軌跡を明らかにしており、これらをふまえてここでは紹介する。

井口省吾は幕末の1855年（安政2年）8月10日、当時の駿河国駿東郡上石田村（現在の沼津市）で井口幹一郎の次男として生まれた。幼名は誠之助といった。『井口省吾伝』<sup>(6)</sup>によれば、曾祖父の井口正直<sup>まさなお</sup>（1779～1860）と祖父の井口応明（1805～1862）は沼津国学著名な研究者であり、井口省吾はとくに正直の厳格な行儀作法の家風の中で育てられたとする。その家風は師団長としての日記の中でも兵士の訓練の訓示のさいにも垣間みえる。

祖父からの影響もあったと思えるが、8歳になると井口省吾は沼津藩士島津恂堂の漢字塾に学んだ。そして1869年（明治2年）、まさに明治の開幕直後に沼津兵学校付属小学校へ14歳で入学している。この沼津兵学校は、1868年（明治元年）、江戸の徳川家の新封地が駿遠地方へ決定し、旧幕臣達がこの地方へ移住する中で、持っていた豊かな人材が投入されて誕生した。西周が校長を務めたほどである。沼津兵学校では、日本人の手で洋学が導入され、そこへ入学するための予備学校として設けられた沼津兵学校付属小学校は日本では最初の小学校であったとされる。<sup>(7)</sup> 井口省吾は当時一般には学校制度が未だ確立されていない時期に、当時のトップレベルの環境下の小学校で教育を受けたことになり、早

くもエリートとしての芽を内包した。<sup>(8)</sup>

そして1874年（明治7年）、井口省吾は上京して、開明的な塾であり、慶応義塾や攻玉社と並び三大義塾の一つとされた同人社へ入塾し、<sup>(9)</sup> 外人教師からの教育も受け、洋風の世界にもふれた。

その翌年の12月、公募に応募して陸軍士官学校へ入学し（20歳）、以降、軍人への道を進むことになる。それは日本陸軍創設の時期に当り、井口省吾は陸軍整備・発展と軌を一にして成長することになったといえる。

陸軍士官学校を卒業すると、大阪鎮台山野砲兵隊（少尉）、参謀本部管東局員（中尉）、を経て1884年新設されたばかりの陸軍大学校へ第1期生として入学（大尉）、卒業後同校の教官となり、1887年にはドイツへ留学している。折から明治政府と陸軍はそれまでのフランス方式からドイツ方式の転換を図った時期であった。井口省吾は当初の陸軍士官学校でフランス軍人から指導を受けていたが、陸軍大学校ではドイツ方式を学び、ドイツから招かれていたメッケルの指導も最後の1年間受けている。ドイツ留学ではこのメッケルの世話をすることが出来、とくにドイツ陸軍の参謀本部付となってドイツ陸軍の中核で研修している。<sup>(10)</sup> ドイツ留学時代の事件として、井口省吾は1889年、ドイツへ来訪した山県有朋内相に陸軍内の藩閥の弊害除去を進言し、藩閥主流の山県から井口の留学中止要求が軍部へ出されたことがあった。その背景には井口はそのような指向性をもつ将校軍事グループの月曜会のリーダーでもあった。そこでは井口の藩閥主義を嫌う近代の実力主義の考え方が吐露され、共有されており、その観点を貫く井口の意志の強さがみられた事件であった。この事件は軍部の児玉源太郎と川上操六とによって井口省吾は守られている。<sup>(11)</sup>

3年余りの留学を経て帰国した井口省吾は参謀本部に配属のあと、陸軍大学校の教官に任命されている。そこではドイツ留学で学ん

だ鉄道輸送の重要性についても講義している。

1894年(明治27年)に日清戦争が始まると、井口省吾は参謀本部、第二軍作戦主任としてかわり、中佐となった。その後再び陸軍大学の教官となり、同校在任中に大佐、そして同校の教頭に就任。その後、陸軍省内で砲兵課長や軍事課長を経て、1902年(明治35年)陸軍少将、参謀本部総務部長となり、軍部の中枢へ昇格している。

そして1904年(明治37年)に日露戦争が勃発すると、大本营陸軍参謀となり、実戦の中で兵站担当として補給の厳しさを体験しつつ活既した。

日露戦争が終結すると、1906年(明治39年)、井口省吾はかつて教頭をつとめた陸軍大学校校長に就任し、約7年間の務めとなった。教官時代や副校長時代から陸大とのかかわることになり、多くの影響を学生たちに与えた。井口省吾時代の陸大の卒業生はその後の戦時における有力な指導者になったとされる。<sup>(12)</sup> また陸大では厳正、公正、権力に左右されない校長だと称され、智、徳、体の品位向上と、とりわけ「智」の向上が教育目標にかかげた。<sup>(13)</sup> 学術では原理を重視し、研究心を失わないこと、しかし明治期後半から浮上してきた社会主義や主観主義を嫌った。

こうして陸軍大学校校長を経たあと豊橋の陸軍第15師団の団長として、1912年(明治45年、大正元年)に就任することになった。ドイツ留学や日清戦争、日露戦争で実戦経験をもった第一級の師団長の誕生であったことは言うまでもない。新設師団へのテコ入れの人事でもあったように思われる。

その点は後述することにして、この第15師団長のその後についても言及しておきたい。

そのあと(大正4年)には朝鮮駐劄軍司令官に就任している。日清・日露戦後の大陸を視野に入れた人材の要として、経験を高く評価された人事であったといえる。

そして、その翌年の11月には陸軍大将に就任している。藩閥主義が主流であった陸軍にあって、藩閥主義を批判した非藩閥の井口省吾が陸軍大将に就任したことは実力以外の何ものでもないと評された。61歳であった。

そして1920年(大正9年)8月に後備役となり、1925年(大正14年)3月4日死去している。まさに明治、大正両時代を軍人としてフルに生きた人生であったといえる。

### 3. 陸軍第15師団の誕生

以上の経歴をもった井口省吾が第2代師団長として1912年(大正元年)11月27日に赴任した陸軍第15師団について次に簡単にみてみる。

日露戦争時、日本は大量の人海作戦で戦い、多くの兵士を失った。そのため全師団を大陸へ動員したため、国内が空白になり、1906年(明治39年)、その補充のために4つの師団が増設されることになった。この4師団のうち最初が第15師団で、日露戦争末期に創設され、当初は朝鮮の平壤に駐留、同戦後は千葉県の習志野へ移駐した。

政府はこの第15師団を東海地方に設置させる方針を打ち出すと、沼津、静岡、浜松、豊橋、岐阜の各都市が誘致合戦を繰り広げることになった。1師団は1万人の規模であり、今日でいえば大工場の誘致に匹敵する。日露戦争後の経済不況下で、各都市にとって師団の誘致は起死回生の起爆剤であったに違いない。

誘致合戦の結果、1907年(明治40年)に豊橋への誘致が決定した。豊橋市南部に広がる高師台地と天伯台地の一帯はいずれも洪積台地で乏水地であり、高師原、天伯原と称されていた。天伯台地の浸食谷に農家や農業集落が点在し、各原のほとんどは入会採草地として利用され、荒撫地でもあった。この一帯は太平洋まで広がり、その面積は約100万坪と広大であった。このような広大な演習地を設定出来ること、しかもその地形面が満州の地

形に類似するという点が師団誘致を有利にしたものと思われる。

誘致が決定されると当時の高師村一帯で師団指令部や野砲、航空、輜重、騎馬など各隊の建設工事が急ピッチで進められた。大林組が全体を請負う中、藤田組や栗田組が担当し、豊橋の宮大工や大工が総動員され、師団司令部や偕行社、将校クラブ、そして師団長官舎などの豊橋初の洋風建築を誕生させた。そして1908年（明治41年）11月16日には早々と師団司令部の開庁式が行われている。その後、洋館と和館を接合した師団長官舎<sup>(15)</sup>や騎兵隊の3旅団も加わり、第15師団が整備・完成していく。

当時の豊橋町は人口4万人ほどであり、そこに1万人の軍隊が加わったことで、電気、水道、ガス、道路、路面電車などのインフラ整備による都市の近代化と膨大な消費人口に対応する商業中心の町づくり、折からの生糸生産の発展などが促され、町は活性化し、大正期中盤には太平洋戦争後の都市再建につながるようになった都市計画案まで提示された。<sup>(16) (17)</sup>

豊橋では、この第15師団誘致の前、1885年（明治18年）5月10日には名古屋鎮台から分かれ、歩兵18遠隊が旧吉田城一帯に立地した。もっぱら、三河や遠江、駿河、伊豆出身の兵士からなる2～3千人の規模で、日清、日露の両戦をはじめ、太平洋戦争時には南方へも転戦し、多くの戦死者を出している。<sup>(18)</sup>

こうして大正期にはそれより前に立地した歩兵18遠隊に新たに陸軍第15師団の大部隊が加わり、豊橋は「軍都」というにふさわしい町になった。その一方、農村の養蚕業をベースに生糸の製糸業も経済を支えた。

なお、図1には第15師団の師団司令部および各部隊、師団長官舎、高師練兵場、高師原および天伯原演習場の分布図を示した。地図の上方中央の南北道路の東側が師団の中核である師団司令部や偕行社、そして多くの兵舎

棟が配置され、南接して高師練兵場がある。一方、南北道路の西側には北東から南西に続く道路に面して東南側に砲兵、輜重兵の部隊、北西側には第15師団を特徴づける騎兵が3旅団配置され、その南西に離れて配置されている施設が師団用の病院である。

そして、これら諸施設の南方に広がる台地の北側（中央を西流する梅田川の北側）が高師原演習場で、その西側は広大な天伯原演習場へと続く。谷間には集落と農地が広がり、その高位の台地の上の原が演習場として利用された。これらの用地は豊橋市が10万円で買収し、軍部へ有償で譲渡した。

なお、参考までに絵ハガキの写真であるが、第15師団の中核部を撮影した写真を揚げておく。全景としては1万人の兵士を収容していた壮大な規模がうかがわれる。図の上方が南で手前が北である。前掲地図でみられる南北方向に貫ぬく基幹道路は左側上方へ伸びる道路であり、上方へ伸びる道路が手前北東から向う南西へ伸びる各部隊を貫ぬく道路である。撮影時点は昭和2年以降とされるが、大正期に建設された建物群そのまま残っており、当時の状況がわかる。その後その一部は昭和期に入り陸軍教導学校、さらに陸軍予備士官学校に利用された。

第15師団の中核である司令部の建物は図の中央の基幹道路の左側に見える「コ」の字形の建物で、その周辺に関連施設棟群、その手前の広場がそれに面する兵舎に収容された兵士達の訓練場であり、閲兵などの式典場として利用された。この一帯は戦後愛知大学のキャンパスとして利用されている。

2つの道路に挟まれた手前は砲兵部隊（現在時習館高校）で、その奥は輜重兵部隊（現在工業高校）。道路の右側は騎兵部隊で、兵舎のほかにも多くの馬舎も並んでいる状況がわかる。

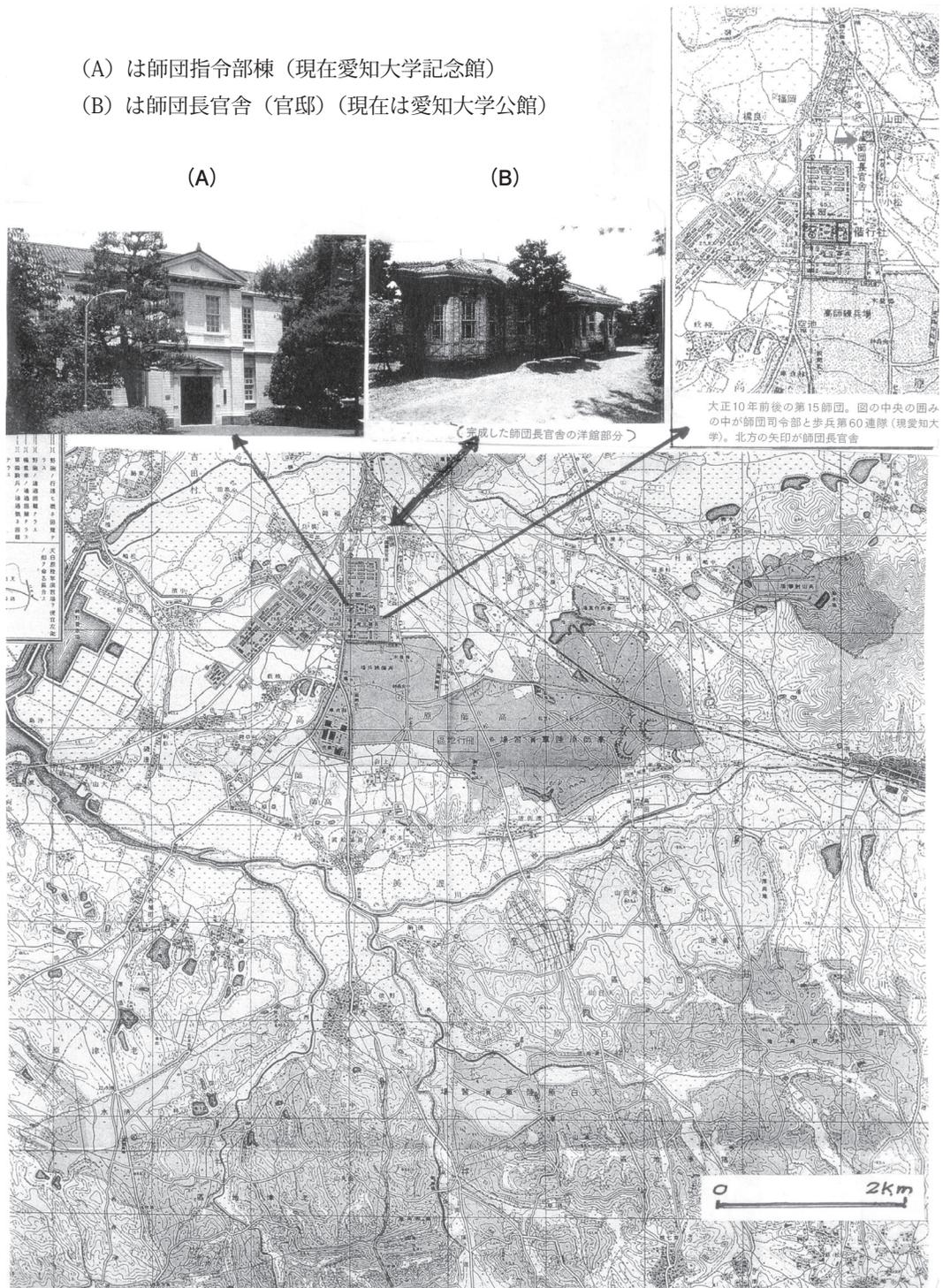
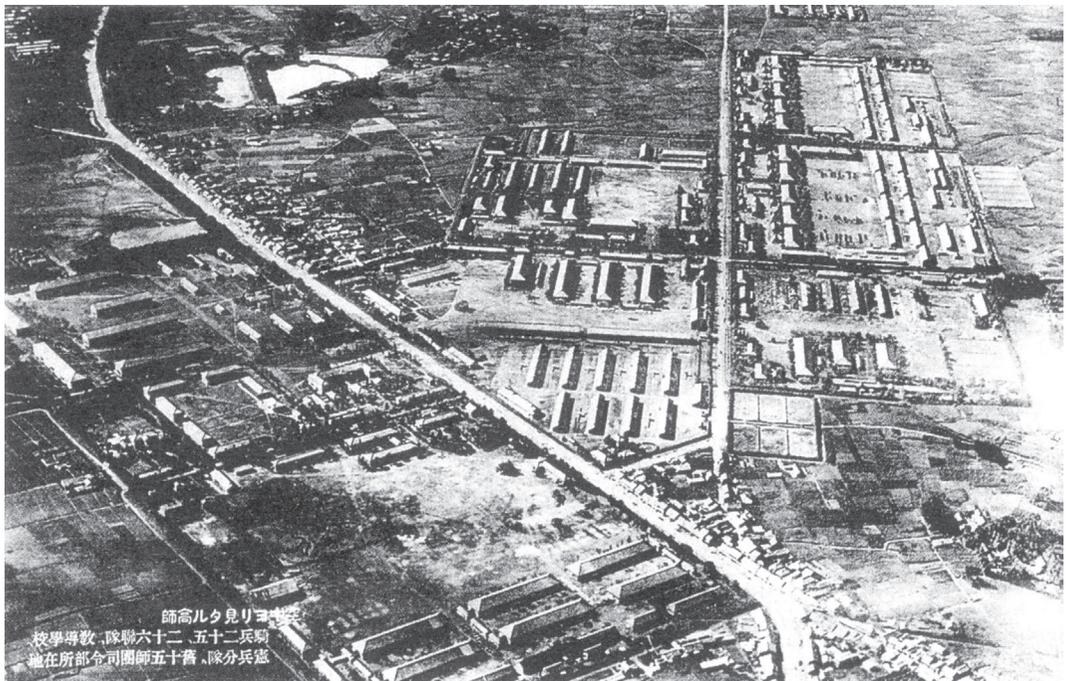


図1 第15師団の配置図



絵葉書 写真1 第15師団の配置 (昭和2年以降の写真である)

#### 4. 日記からみた師団長の豊橋時代の空間行動

##### (1) 井口師団長の日記をめぐって

前述したように、井口師団長は長期にわたって日記を記録してきた。

その日記は克明で、最初に日付、曜日、天候が記され天候については、例えば、「晴」、「晴後陰」、「晴寒旅」、「半晴宵驟雨」、「陰小雨」、「晴炎暑」、「半晴」、「苦熱如燬」、「半晴夕驟雨」、「半晴稍涼」、「朝涼後晴暖」、「朝陰後晴」、「西北強雨晴」、「小雨」、「陰微雨」、「雨」、「驟雨暖」など天候状況簡潔にして適確な表現を行っており、この点だけでも天候の状況とその変化を追うことが出来る。そして時に摂氏の温度も付加されており、井口師団長の天候表現を客観化することも可能である。師団長はかなり移動もしているが、豊橋滞在日だけ取りあげて、天候の定点的観察をすることもできそうである。戦時における天候は重要であり、それが毎日の天候記録にも

表現されているものといえる。

本文では必ず時刻と行動先の地名、建物訓練場というように場所、目的が記録され、例えば集会に参加した時は参加者名、参加人数、そこで行事内容も簡潔に記録されている。そのさい、本人の講話機会も多く、その講話の要点も記し、他人の講話についてもその内容の要点と時に評価の内容までも付記するなど、簡明ながら克明で几帳面であり、本人も性格があらわれているように思われる。そのほか、直接会った来訪者、留守中に来訪し、名刺を差し出した人名、信者の差出人、差出先の人名も丁寧に書き込まれている。

また、視察、招待で出張し、本務の訓練や演習での出張についても、目的、行き先、交通機関（徒歩や馬の場合も）、現場での具体的な展開とその結末およびそれをめぐる評価なども克明に記録され、記録を読む者に具体的なイメージを描けるほどの記録としての文章力がある。

そのほか、奥さんと結婚をめぐるともな

ど家族および親戚筋に関する動き、お手伝いの人の動向なども付記され、井口師団長の公私にわたる幅広い記録になっている。

以上の諸点からも井口師団長の日記は、研究対象にもなり、とりわけ井口師団長が最も厳しい臨戦に対応した日露戦争期の日記については、日本政治外交史研究会がそれをまとめ<sup>(19)</sup>、また飯森明子はドイツ留学時代の井口の行動、施行などを中心に論じ<sup>(20)</sup>、総説的には波多野勝が『井口省吾伝』<sup>(21)</sup>として編集している。

そのような中で、井口省吾の出身地である沼津市大岡の上石田自治会の中の「上石田を語る会」は郷土史を学ぶ一環として井口省吾の生涯に関心をもち、彼が陸軍大学校の校長時代と第15師団長時代の足跡を明らかにするために、その両時代の日記を翻刻してきた。その「上石田を語る会」の一行が2015年11月15日、まさに愛知大学の創立記念日に愛知大学東亜同文書院大学記念センターへ来訪し、記念センター展示室および師団長官舎（現在の愛知大学公館）を見学するとともに、その翻刻の提供を受けた。とくに師団長時代の翻刻については、その全文のほか、豊橋とかかわりの深い記録のみられる日記部分を抽出した形でも提供を受けた。

本稿はその熱意に感謝し、それをデータとしてみなし、それをふまえ紹介しつつ師団長時代の井口省吾の豊橋地域を中心にした行動に就いてそれが浮びような日記を抽出し検討しようとしたものである。

そのさい、日記内容は多様で、多くの情報が含まれ、大変興味深いのが、日記内容から、着任時の交流、豊橋への視点、訓練と演習の空間、などの観点から該当する日記を抽出し、それを中心に検討することにした。

また、著者は地理学が専門であり、井口師団長の行動を空間的に把握しようと地図化して把握することを試みた。

## (2) 豊橋への赴任とあいさつ回り

井口省吾は、陸軍士官学校、陸軍大学校での教育を受けたあと、3年あまりドイツへ留学し、参謀本部付を経て、陸軍大学校教官、そして42歳で教頭、46歳で少将となり参謀本部で総務部長に就任、軍人の指導者としての道をたどった。そして日露戦争では臨戦経験を重ね、1906年には陸軍大学校の校長となり、3年後には中将となっている。日露戦争での実戦経験を将来の指導者達に教育する役割を期待されたものと思われる。

そして1912年（大正元年）、57歳で豊橋の陸軍第15師団長に就任し、以降2年間あまり、現場の指導者達と兵士達への教育指導に当たることになった。こうして1万人の1師団のトップとして、より総合的な軍隊教育の場に臨むことになった。そのあと朝鮮での軍事司令官、さらに軍事参事官、そして1916年には陸軍大将にまで昇りつめるが、豊橋の陸軍第15師団長時代こそが井口の軍人であり、軍人指導者としての集大成を示したものといえる。その点でこの時代の彼の日記からはその集大成の内容を読み取ることが出来そうである。

日記によれば、井口省吾に第15師団への就任が決まったのは、陸軍大学校校長時代の1912年11月13日のことであった。すなわち、

「客月31日、長谷川参謀総長ヨリ、又本日大島次長ヨリ、大演習後、予力第15師団長ニ転任、件ヲ内示セラル」

とある。それについての感想は何も記されていない。その後いつもと変わらぬ毎日の陸軍大学校での埼玉、多摩方面での演習を記録した日記が続く。

そして11月21日になって自分の国税額をいつものように記したあと、次の豊橋生活の場合が頭をよぎったのか「住宅引継ノ件ニ関シ、在豊橋第15師団長内山小二郎ニ書ス」とある。

その直後に陸軍大学生の卒業判定に出席し、翌11月23日に、「在豊橋内山中将ヨリ返書アリ、任命後十日位ニテ官舎ヲ打払フ旨申

来レリ、直ニ同人ニ書シ、来ル廿六日任命発表、事ヲ申シ送レリ。」と転任を実感しながら陸軍大学校で迎える卒業式での告辞について構想している。その内容は卒業を祝しつつ、責任の重大さと卒業後の品格陶冶を求め、具体的には国家的精神の上に思想と人格を涵養する「精神の修養」、原則の尊重と研鑽を積む「學術の研鑽」、実地の実務と研究を失わない「実地ノ鍛錬」を挙げている。この方針は第15師団時代にいても井口省吾の基本的な教育方針となった。

こうして1912年（大正元年）11月27日、西園寺総理大臣から召状で清掃参内し、天皇や各皇族、軍関係者の列席の場で天皇から第15師団長に井口省吾が任命された。

このあと皇族や政界、軍関係、学生などから賜物や祝言が殺到し、そのお礼参りのあいさつや寄付などに忙殺されていく様子がわかる。その顔ぶれは当時の日本の中枢を担う皇族や軍部、政界の関係者達で、詳細な井口の

日記はそれらのネットワークを克明に描き出している。それは新設された第15師団長の地位がいかに重要であったかを物語っている。

図2は1912年（大正元年）12月6日、いよいよ豊橋へ向けて東京から赴任する日の東京での見送り人、各駅での歓迎出迎え人の名前を示した。東京では新橋を午前8時30分に新橋発最大急行で出発。まずは単身赴任で妻や「花子、末子、冬子、完倉いさ、老婢いさ、俊彦残留ス」とあり、「永井大作久、池田志マハ昨夜豊橋＝向ケ出発セリ」とある。見送り人は三宮殿下名代、各大将や各侯爵のほか数百人に及んだとし、いかに盛況であったかがわかる。当時の東京と豊橋間はこの列車でも6時間20分を要しており、簡単に往復できない時間距離であったことに加え、井口省吾の陸軍士官学校や陸軍大学校、参謀本部などの経歴が多くの関係者を新橋駅へ走らせたものといえる。

当時の東海道線はまだ丹那トンネルが出来

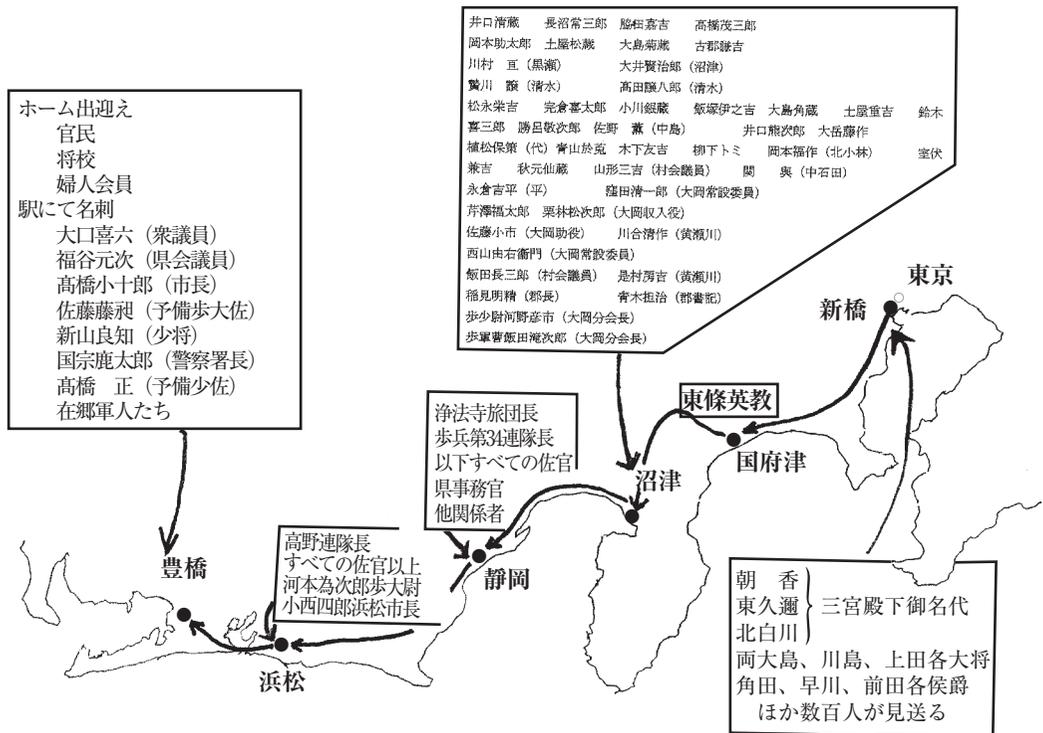


図2 大正元年12月6日 豊橋へ着任の行動空間

ておらず、今の御殿場線を正式ルートとしていた。その入口に当る国府津では陸軍大学の同じ1期生でドイツへ共に留学した東條英教が駅頭で迎えに来ている。東條は東條英機の実父である。しかし、東條はその著書で薩長閥のボスである山縣有朋に嫌われ、日露戦争の作戦ミスで旅団長を解任された。薩閥主義嫌いの井口省吾に共感し、永年の友として迎えに来たのであろう。

そして、次の沼津駅では大歓迎を受けている。井口省吾の出身地であり、彼の次々の出世と、離れてはいるが隣県の愛知県、それも静岡県寄りの豊橋への赴任に、彼を郷土へ帰ってきたふんいきで歓迎したのであろう。井口家の親族をはじめ、地元や周辺地域の指導者、そして多くの個人達である。多くの寄贈品も受けている。井口省吾はよほど嬉しかったに相違ない。彼らの名前を逐一記録している。

次の静岡駅には第15師団管轄下の浄法寺旅

団長や歩兵第34連隊長や佐官達、そして県事務所関係者など、ここでも多くの人々が歓迎している。浜松駅も同様で、連隊長と佐官以上、市長などが歓迎に顔を揃えている。浜松も第15師団の管轄下に入ったからである。

そして目的地の豊橋駅へは14時50分着。将校はじめ官民あげてホームを埋め、国会議員の大口喜六、県会議員の福谷元次、市長の高橋小十郎、地元渥美郡長の本原勝太郎のほか大佐、少将、警察署長、在郷軍人らと名刺交換をしたと記している。駅を出ると騎で師団指令部へ向い、15時40分着。司令部の高等官や下士官達とそれぞれ伺候式および面謁式を行ったあと、内山前師団長を官舎に訪ね、市内の岡田屋旅館へ18時に到着した。その時間までそれぞれ詳細に記録されている。

図3は到着した翌日の行動を示した。図中の①でまず偕行社で各部隊の将校達から伺候式を受けたあと、②で師団指令部で内山前師団長から事務の引き継ぎを行い、関係者と昼

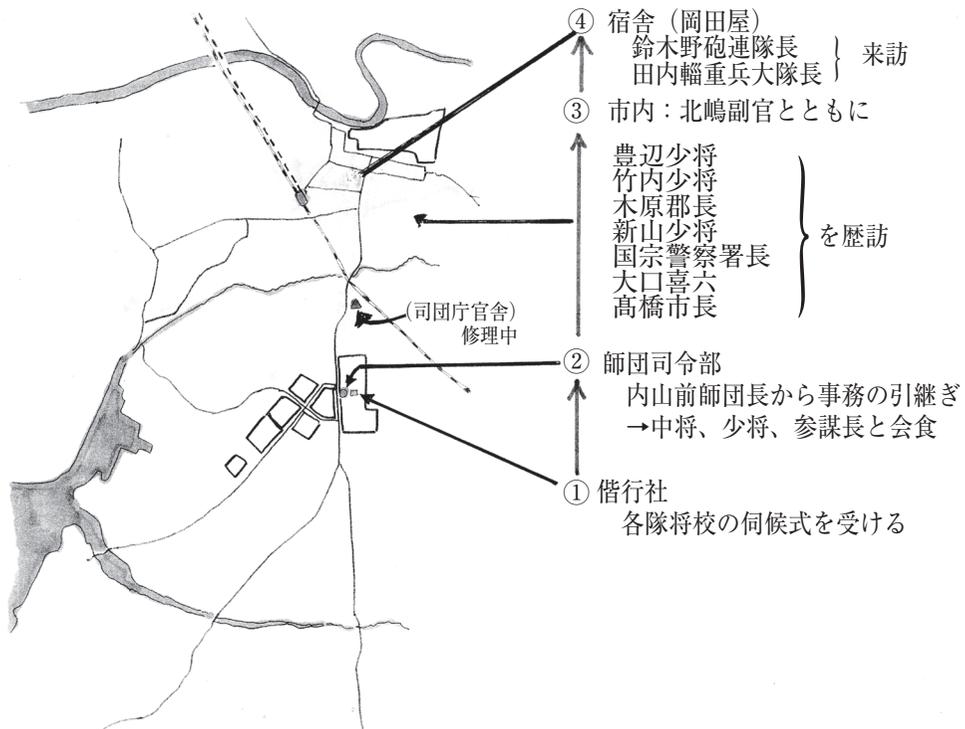


図3 大正元年12月7日の行動空間

食会。③でそのあと師団関係者を始め、国家警察署長、大口国会議員、高橋市長らを訪ねてあいさつをし、16時に岡田屋旅館へ戻っている。しかし、④でそのあとも来訪者が続き、さらに身内の死亡通知を受けたり、来信への返事書きなど、几帳面な井口にとっては落ちつけない様子がうかがえる。

そしてこの日もまだ師団長官舎には前師団長がおり、そこへは入れず、市内の岡田屋旅館に戻っている。

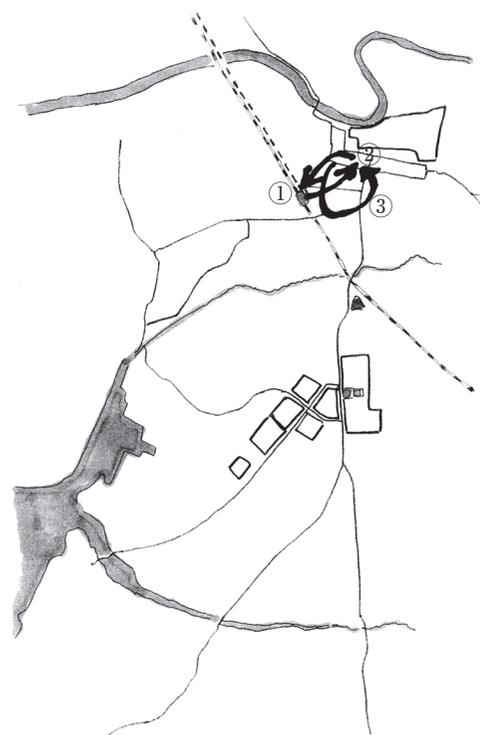
そして翌日の3日目の行動は図4に示した。①まず前任者の内山前師団長が九州小倉の第12師団長として家族そろって赴任するのを豊橋駅で見送った。見送りの軍隊が整列し、婦人会員が繰出で見送ったため、賑やかであったようだ。②次いで岡田屋へ戻ると次々とあいさつの来客があり、対応に多忙でまだ落ちつけないが来訪者名はしっかり記録している。

ところで内山前師団長が離任したため、師

団長官舎の利用が可能になり、まず永井大作が修理中の官舎に移り、梱包した荷物を運び込んでいる。第15師団は開設されたが、当初の師団長官舎は仮で、当時の高師村ではなく、市内の花田町にあった。その後、司団指令部の北辺から約500mほど離れた石塚町小松の丘の上に4,900㎡の用地を求め、正式の官舎を建設することになり、1912年（明治45年）5月に完成している。洋風の折衷木造建設で、司団指令部棟と同じく、豊橋の宮大工や大工達の力作であった。

したがって、前任者の内山師団長は約半年ほどしかこの新官舎に居住出来なかったことになる。それに対して井口師団長は新築新装の官舎に最初から入居できることになった。厩も出来ており馬を引き入れ、馬丁も準備できていた井口師団長は毎日この馬で司団指令部へ通うことになる。

④ 夕方、市内の岡田屋旅館に滞在していた妻や手伝いの池田志またちが市内を散歩し



- ①内山前師団長（小倉の第12師団長へ）  
を駅で見送る  
軍隊列  
将校婦人会員
- ②宿舎  
曾我守道（東本願寺派僧）  
福田釣夫（愛知銀行豊橋支店長）  
松田（高級副官）  
関谷（副官）  
松原久之（判事）  
部下将校  
相当官）たち
- ③市中を散歩  
妻  
手伝い  
池田志マ）と

図4 大正元年12月8日の行動空間

たとある。ようやく家族も引越後の余裕ができたということであろう。この日はいずれも市内だけの移動であった。

しかし、あいさつは市内だけではすまなかった。東海地区を管轄する第15師団は愛知県はもちろん、静岡県や長野県にも及び、演習地は岐阜方面へも広がっていた。とりわけ隣接する静岡県は重要であった。

続く12月9日には浜松、静岡の連隊へのあいさつと巡検に豊橋駅を出発している。矢継早の行動である。それを図5に示した。

図中の①はまず浜松の歩兵第67連隊へ鈴木参謀長と北嶋副官を随行させて巡っている。そこでは浄法寺旅団長の歓迎を受け、図中に示したように各部署からの報告を受け、情報を確保したのち、各大隊と中隊の兵舎や兵器庫などの関連施設を巡視し、旅団長はもちろん、連隊長はじめ連帯関係者、それに市長、部長、学校長、警察署長など地域の指導者や監督者と一同に顔をあわせ昼食会を催してい

る。井口師団長からの就任のあいさつと、67連隊の状況把握を行う儀礼だとみることができる。そのあと衛戍病院にも立ち寄っている。井口師団長は自ら腎臓に弱点をもち、健康には気を使うほか、戦場での経験、演習時の兵士の負傷や回復状況には特別な考慮を払っているところがあった。それが衛戍病院の視察を行ったのであろう。

そのあと静岡へ向い、連隊長とその関係者が静岡の主要な指導者に出迎えられ、市内の大東館へ投宿している。早速来訪者たちに応対するが、酒気を帯びた来訪者には面会しないと、態度を明確にしている。

翌12月10日には歩兵第34連隊の兵営を巡校に訪れ、図中の②に示したように連隊長からの状況報告を受けたあと、連隊長持ち前の軍隊精神の基礎を明治天皇勅諭五ヶ条と国体を忘れないことと確認している。井口師団長は、日露戦争後、軍隊の精神教育の低下に危惧を抱いているところがあり、それがこのような

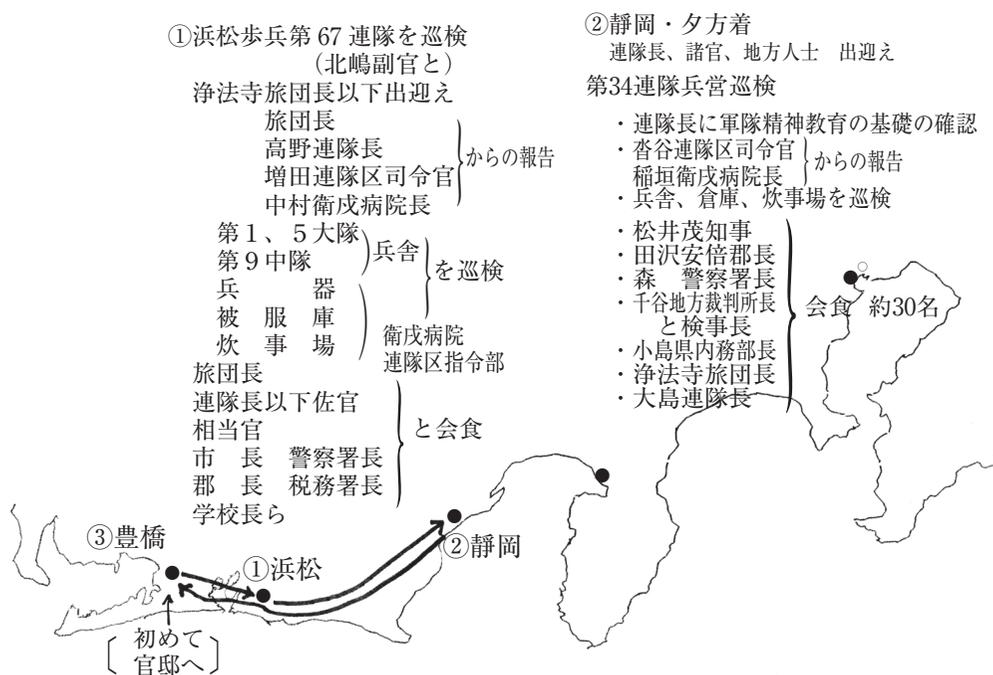


図5 大正元年12月9日、12月10日の行動空間

機会の随所にあらわれていることがうかがわれる。

そのあと各組織の担当者から状況報告を受け、兵舎その他施設を視察、引きつづき将校集会所で県知事や郡長、警察署長、裁判所長、検事長、県内務部長、市長など地域の官側の指導者達約30名と会食をしている。新任者としての顔合わせ・あいさつの儀礼的な交流会である。

以上の行事が終了したあと、ここでも衛戍病院を視察し、あわせて連隊区指令部も巡視している。そして18時頃豊橋へ帰着している。

ところで、この日に夫人らが高師の師団長官舎へ中井中佐からの協力で引越したと記録され、③師団長もこの日この「官邸」へ帰っている。この時の官邸には師団長と夫人、永井大佐久、池田穂三郎、小黑夫妻と武夫、池田志まの8人が居住することになった。のちには子供たちも加わり総人数は12～13人になる。

図6はその時の官邸の平面図で、中央から右手に洋室が並び、師団長の執務室や応接室

などに使用され、左手には和室群が接合される形で配置され、そこが各人の生活の場となった。この和洋折衷の師団長官舎の建物は全国でも珍しいケースであった。いずれにせよ、この12月10日から師団長の執務を含む生活の拠点が確保されることになり、以降、本格的な活動が始まることになった。

### (3) 当初の豊橋への視点

いよいよ官邸を拠点とした生活が始ったが、赴任後の任務は多忙で、官邸で落ちつくヒマはない状況が続いた。初めての休日が図7に示した年末の12月29日である。この日は日曜日で天候は終日雨。絶好の骨休み日になる筈で一日中官邸に居たと記録されている。

しかし、①騎兵19団橋淵少尉の来訪があり、さらに、②「豊橋私立商業学校校長遠藤安太郎来訪」とある。初めての地元豊橋の学校関係者の来訪であった。用件は学校の事業に協力賛成して欲しいという内容である。その事業内容については明記されていないが、師団長に寄付金を要請したものと思われる。それ

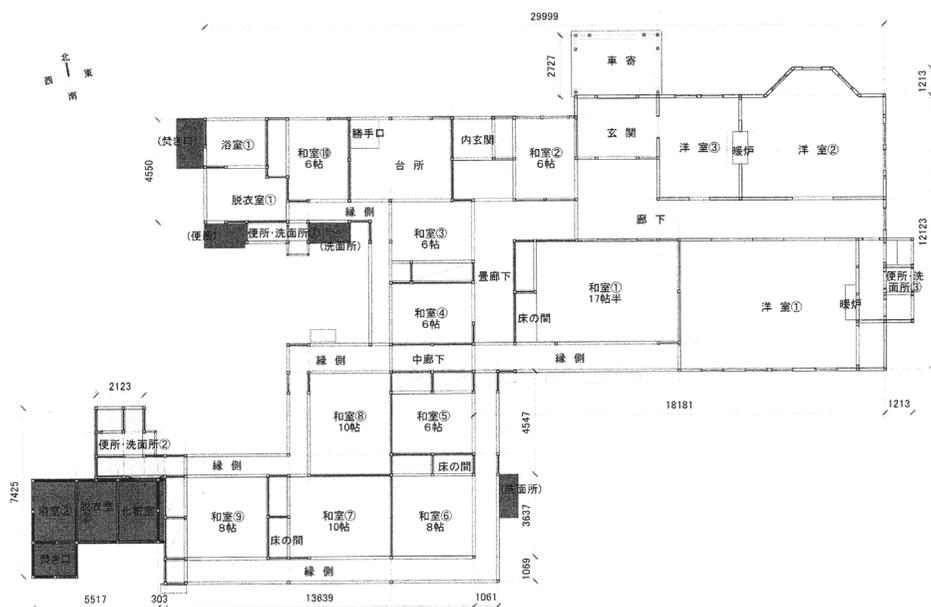


図6 官邸の平面図(黒塗り部分はのちの増築)  
(豊橋教育委員会、愛知大学(2015)『愛知大学公館建築調査報告書』より引用)

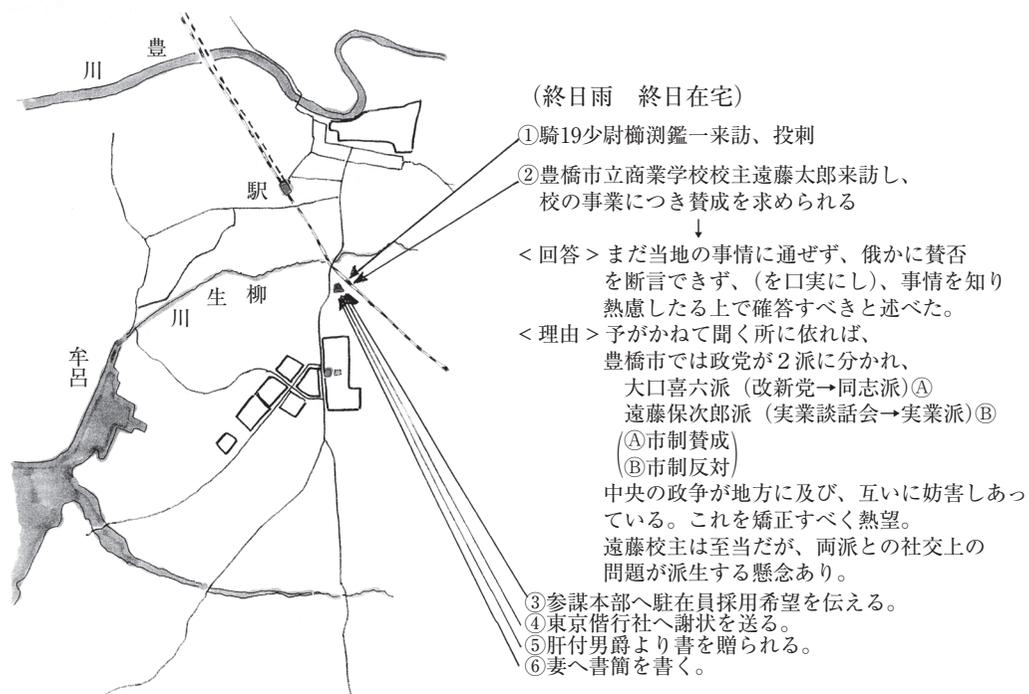


図7 大正元年12月29日の行動空間

に対して師団長は「俄かに賛否ヲ断言シ難キヲ口実トシ、追テ事情ヲ知り熟慮シタル上ニテ確答スベキヲ述ヘ置キヨリ」と記している。つまり、即答を避けたということである。

そのさい、その理由についても記しており、それによれば、師団長が豊橋へ赴任するに当り側聞したところでは、豊橋は政党が2派に分かれて政争が激しく、同志派の大口喜六派と実業派で商工業界をバックにした遠藤保太郎派が互いに企画を妨害しあい市の発展を阻害していること、したがって、遠藤校長の要請の件は十分援助の価値があるが、この遠藤がどちらかの派に属していれば、その派を支援したことになり、バランスを欠くことになってしまうからだと記録されている。

さすがに師団長だけあって、赴任先の政治的状况も把握していたということになる。確かにこの時代の豊橋は豊橋を革新したい同志派と実業界をバックにした実業派が主導権争いを展開し、市制施行についても実業派が足

を引張ったりした。豊橋町時代に経済や教育などに力を注いだ三浦碧水の後継者となった大口喜六は、自ら実現した市制後初代市長になり、第15師団の誘致とそれに伴う遊郭移転事業などで成果を挙げ、師団長赴任の頃には国会衆院の議員となり、地元と国のパイプ役を果すなど、豊橋市政をリードしていた。そのため、師団長の催しには不可欠な人物として名前を毎回残している。

一方、この時代、実業界では商業が中心で、製造業は製糸業が主力であったが、市況変動の激しさもあって株式会社化は困難な状況であった<sup>(22)</sup>。その点でも先を見て都市の近代化をめざす大口派が市政をリードする状況がみられた。

師団長はこの時期の豊橋の政界の争いをそのままにとらえ、「予之ヲ遺憾トシ矯正ヲ熟望シ在リ」と記している。

この休日の後半は③～⑥のように官邸内でもなお業務の雑事をこなしており、休養日と

はいえなかったようである。

なお、契機となった豊橋私立商業学校の一件はなぜそのように展開したかは不明であるが、これより前の12月21日に市内の主要人物100名余を偕行社に招待し、師団長の就任披露の宴会を開催している。その席上の招待者名に同校校主の遠藤安太郎の名前も見えることから、遠藤校主としては師団長に親近感を抱いたものと思われる。

#### (4) 演習と訓練の日々

師団長の任務の中心は師団の力を養成することであり、訓示のみならず、個別訓練、さらに演習によって鍛えられる。赴任後すぐにはその機会がなかったが、12月27日に各独立隊長を偕行社に集め、諸報告をふまえて戦術実施を行うさいに軍隊教育について、本師団での例をあげながら次のように論じ訓示している。

##### 1. 諸報告をみると各団、各隊の行軍力は

劣弱なことが明らかで、すぐ矯正すべき。

2. 将校以下活気に乏しく、動作緩慢。

3. 故兵の各個教練復習を軽んじている傾向がみられること。例えば馬術も野外騎乗よりは各個の教練が必要だ、など。

この3点はより具体的ないくつかの例示をふまえた訓示であり、ここでも日露戦争を経験した師団長には、戦勝後の訓練上の軍隊の気の緩みがやはり気になるという点に力点が置かれている。1913年（大正2年）1月30日の騎兵25、26連隊の教育検閲後の講評時に、旅団長の不謹慎な態度を注意したのもそのあらわれだろう。

年末から新年早々には演習が行なえないほど雑事をこなすが、いよいよ1月31日の北西風の強い日、高師練兵場での騎兵第19連隊の軍隊教育のチェックから訓練の世界へ入っていく。

図8はその日の行動を示したもので、①は高師練兵場、③は営庭と馬場で実施し、まだ

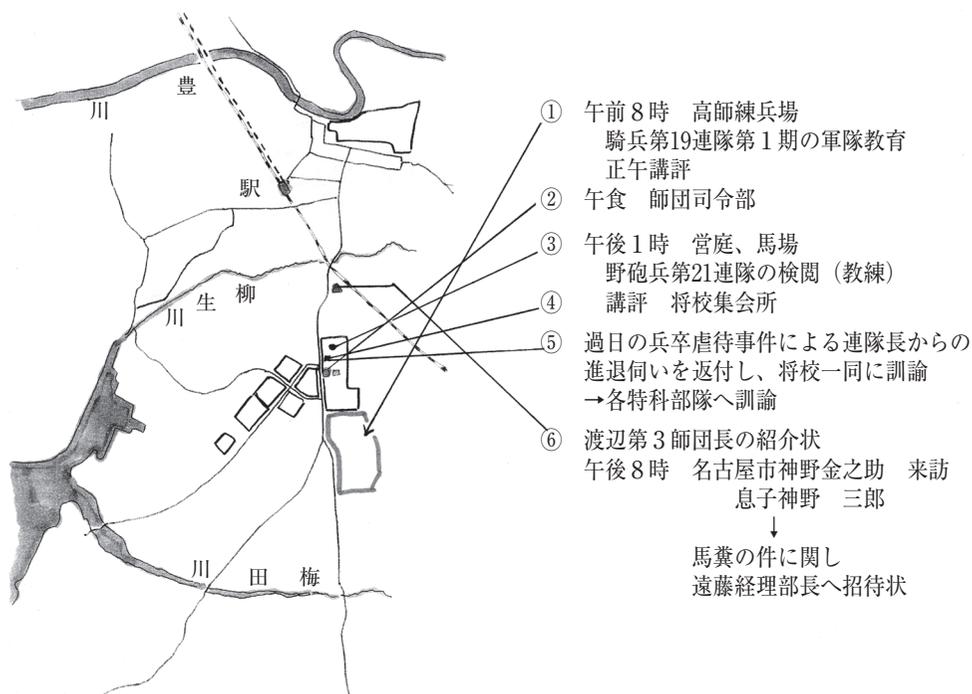


図8 大正2年1月31日の行動空間

師団指令部の枠内ないし近傍での展開に留っている。④それらについては必ず講評をすることで、すでに師団長の姿勢は知れ渡っていたことを想像すると力を込め緊張した訓練だったことがうかがわれる。それは⑤にもつながる。

ところで⑥は在名古屋の第3師団長からの紹介状をもって午後8時の遅い時刻に名古屋から神野金之助とその息子の神野三郎が来訪し、馬糞の件を要望したことが記されている。

神野金之助は当時名古屋の有力商人で、少し前に豊橋市西部の浅瀬の干拓を試みて失敗した長州人毛利祥久の跡を引き受けて大規模な神野新田を造成した人物である。明治20年代末には大規模築堤工事が完成し、同30年代から入植が本格化した。しかし、塩分も多く収穫量は低かったため、地力が不安定な状況にあった。そこへ騎馬中心の第15師団が開設されたことから、地力維持のため、師団の馬糞利用に注目したのがこの陳情で、同席した息子の神野三郎がその後の神野新田の発展を

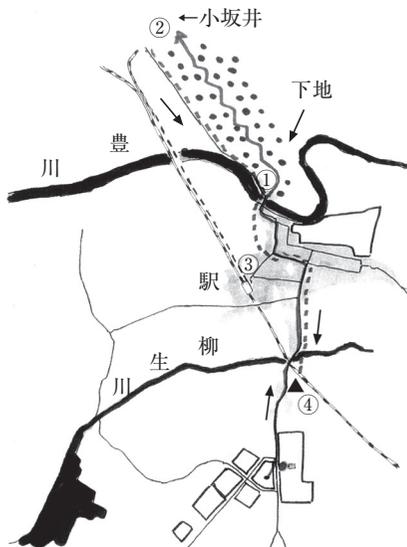
促した。

井口師団長はその場で経理部長を紹介し、便宜を図っている。それまで地元の民に若干の寄付をしたことはあるが、この件は初めての本格的な地元への貢献であった。

それ以降、しばらくは部隊別教練は行なわれたものの、野外演習は行なわれていなかった。それが初めて行なわれたのが3月5日であった。

図9はそれを示したもので、歩兵と砲兵の連合演習が豊橋市の豊川を挟んだ対岸の①下地町からその先にある②小坂井にかけての一行で行なわれた。井口師団長は3月2日に新馬で現地を踏査している。演習地は豊川下流の沖積低地で、低湿地をベースにした演習だといえる。ただし、その演習内容については記されていない。講評も意見も内容は不明である。

ただし、その帰路に中山副官と立ち寄った豊橋駅前にあった③安藤動物園については、私設としては説明の良いことも含め、評価し



- ① 下地町 } 歩砲連合演習 ●●●●●●  
② 小坂井 }

砲兵大佐 } 講評  
統監 }  
井口師団長 } 意見

- ③ 安藤動物園を一覧  
(中山副官と)  
園主は親切な説明  
入園料を受け取らず  
「私設としては奇獣珍禽  
比較的多し」



〔豊橋の史跡と文化財〕より 安藤動物園

- ④ 午後4時半 帰宅

図9 大正2年3月5日の行動空間

ている。

この安藤動物園は安藤政次郎によって1899年(明治32年)に豊橋駅前に開設された。今の広小路通りにある精文館書店付近で、当時は中心街は呉服、札木、伝馬方面だったので、まだ駅前も閑散とし、畑に取り囲まれていた。安藤はそこにクマ、トラ、ライオン、ペリカン、ニシキヘビ、ツルなどを飼育、展覧し、人気を集めたという<sup>(23)</sup>。この動物園はその後、駅前道路の整備により松葉町守下へ移転、昭和6年(1931年)豊橋市へ移管され、そのあと向山へ移転した。名古屋の動物園が大正7年開園であることから、この安藤動物園の先駆性がきわ立っている。

師団長は恐らく噂に聞いたかこの安藤動物園を演習のあとの一時として楽しんだということだろう。のちに家族も同行して同園を楽しんでいる。

その後、浜松での部隊の演習や沼津出張、豊橋での各種教練が続き、4月12日から14日

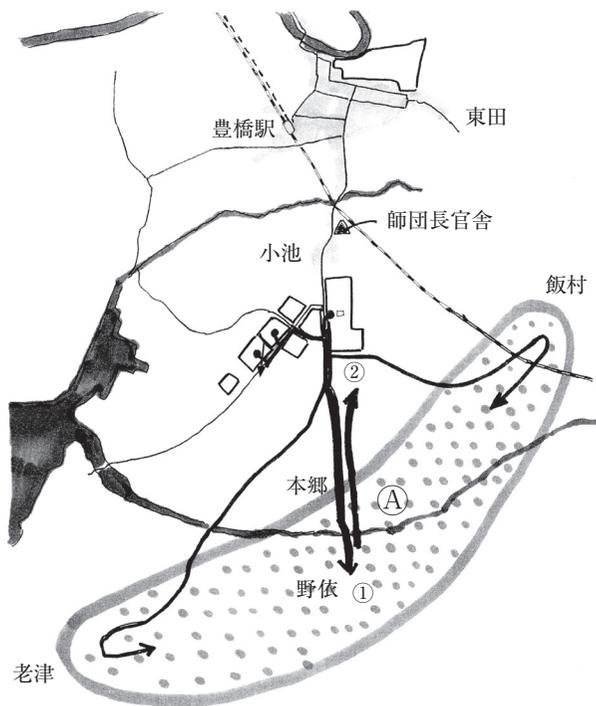
まで病に倒れ、官邸で臥し、その間の行事参加も見合せている。

そしてその直後の4月16日、騎兵第25、26両連隊対抗演習に臨み、意見を述べている。

図10はそれを示したもので、演習場は東は飯村から中央は野依、西は老津と広大な高師原と天伯原を活用し、飯村と本郷の間の高地の衝突丘で展開した。終了後、師団長は①野依で意見を述べ、午後からは②高師練兵場で騎兵第26の密集教練を行っている。これは①の師団長の意見の反映と思われる。

なお、この当日分ではないが、この頃の第15師団が重きを置いた騎兵の訓練と演習風景を掲げる(写真2)。第15師団の写真はこれまでなかなか手に入らなかったが、梶田則子様(第15師団にいた祖父の遺品としてご提供いただいた写真)を利用していただいた。当時の訓練、演習の様子がリアルに伝わってきて貴重である。

図11はその後豊橋以外の土地へ出かけた主



①騎兵25、26両連隊の対抗演習

①師団長意見  
 午食(取り寄せ)

②高師練兵場で  
 騎兵第26の密集教練

図10 大正2年4月16日の行動空間

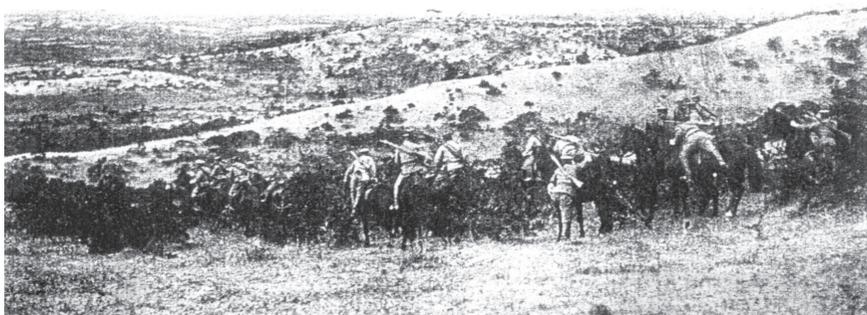
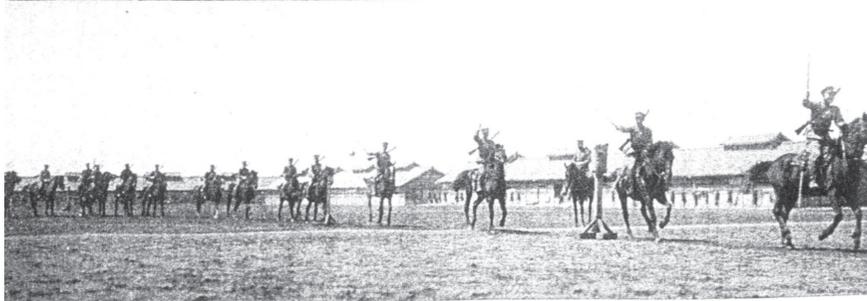


写真2 第15師団の騎兵訓練（同師団アルバムより）

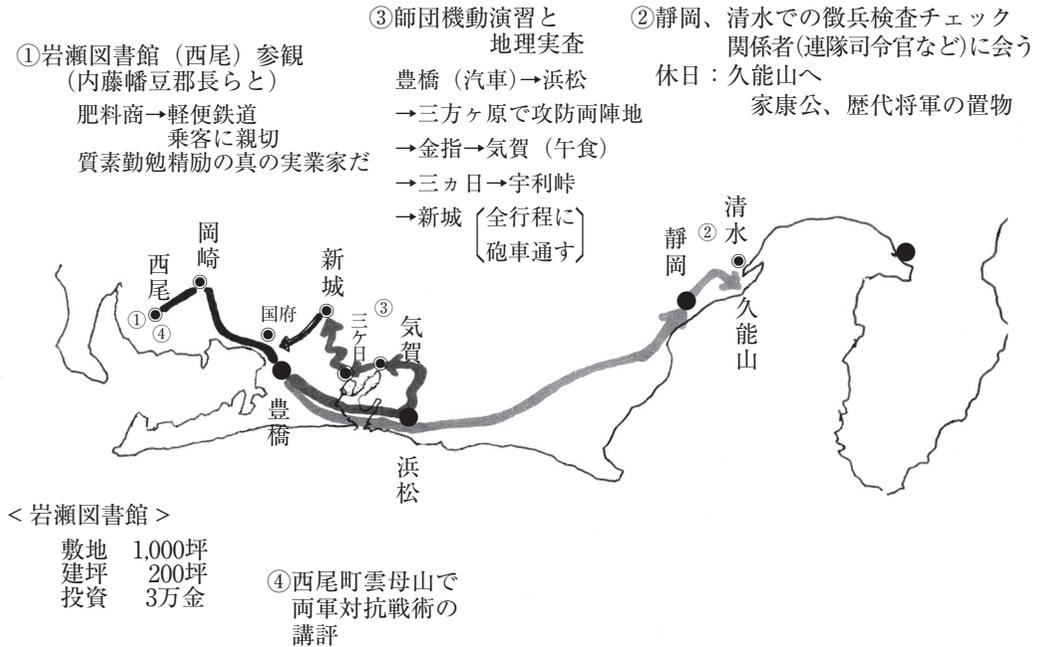


図11 大正2年4月28日の行動空間…①  
大正2年4月29日の行動空間…②

大正2年8月16日の行動空間…③  
大正3年12月22日の行動空間…④

な事例を地図上に示した。西は西尾から東は清水・静岡に広がり、その他では飯田方面への行軍もあった。

①は4月28日、西尾の岩瀬文庫への訪問である。岩瀬文庫は実業家であった岩瀬弥助が、図書館をつくる目的で収集した和本を中心に文学書から歴史書、動植物書、博物書など幅広い分野から構成し、1908年（明治41年）に開設された。岩瀬は肥料や鉄道会社など運営し、私立図書館として地域へ貢献した。師団長は西尾での徴兵検査で前日から西尾入りし、岩瀬図書館を見学。岩瀬の社会貢献や経営する鉄道の借傘制度などを賞讃している。軍人ではあるが、井口師団長の幅広い関心の一端が見える。

②は翌4月29日の静岡、清水でのこれも徴兵検査の実視のための出張で、前日28日から清水入りし、29日に久能山で徳川家康の遺品を一覧している。これも井口師団長の地域から

学ぶ関心領域の広さを示しているといえる。

③は8月16日の師団機動演習と地理調査で、浜松北方の三方ヶ原から浜名湖北岸を西進。三ヶ日から難所宇利峠も砲車を通過させ、新城で宿泊、翌日は国府へ向い遭遇戦陣地と攻守陣地を巡っている。そして④は西尾南部のかつてよく黒雲母が採掘された雲母山での対抗戦演習で、師団長の次の転任も近いと思われる1914年（大正3年）の年末に行なわれた。

図12は1913年（大正2年）に偕行社で行なわれた晩餐会の招待客一覧である。このような行事は時々開催され、また色々な記念日に市内の当該所で開催される会に師団長としてたびたび招待されることも多く、そこで出席して地元の主要なメンバーと交流している。

この時は師団側の招待で、師団側の各隊長も含め全部で45人ほどが参加した。ここではそのうちの約半分以上にあたる招待客の名前が記されている。その多くは政界や行政界、

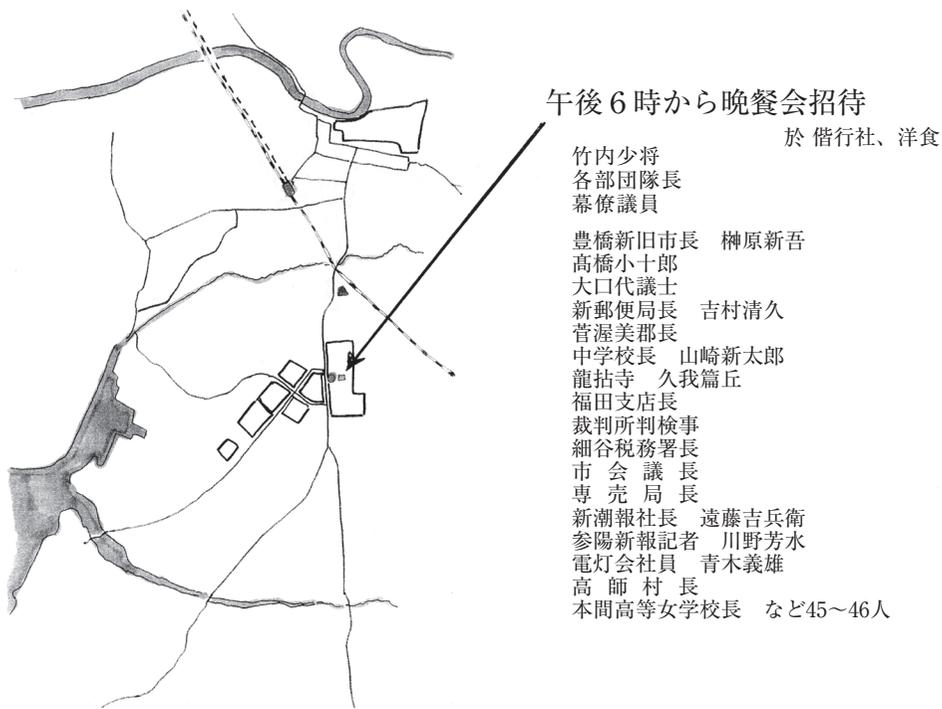


図12 大正2年10月1日の行動空間

教育界などでメディア系も2名の名前が挙っている。残る招待客は師団側のメンバーも多いものと思われる。一覧してみると経済界のメンバーがほとんどみられない。前述したように第15師団が豊橋へ立地した明治末期から大正初期においては、商業も工業も注目されるような企業はまだ十分には育っていなかったことを示しているとみてよいだろう。その空白部分を第15師団が進出して埋めたということである。製糸業も中小企業が多く、個々の企業者は招待されるレベルへ至っていなかったと思われる。招待者一覧から、そんな特徴を読み取ることが出来る。そのため、師団長と直接交渉できる事業者は限定的であったといえる。

ところで師団長は任命時から皇室、皇族との関係は深い。国体維持をモットーとする井口省吾にとってそれは大きな拠り所であったように思われる。皇室関係者が東海道線で上下するたびに他の関係者を引率して豊橋駅で

歓迎したり、皇室関係者の乗車する通過列車をホームで迎えたりしているし、また、沼津の御用邸に出かけて、皇室関係者に御機嫌伺いをする記録も散見される。

そんな中で1913年（大正2年）11月18日の名古屋から新橋への宮廷列車への同乗はきわめて名誉なことであったに違いない。当日の日記は普段の数倍のスペースに及び、克明である。

その状況を図13に示した。この宮廷列車は陛下のほか、伏見および閑院両宮殿下が乗車し、奉送者も渡辺宮相、原内内相、長谷川参謀長、福島関東都督、楠瀬陸相ほか愛知と静岡両県知事、岡第3師団長など、いわば重臣達の豪華列車であった。それに井口省吾第15師団長も同乗し、国府津まで対応した。

車中で陛下は両殿下を通して同乗者に御下問があり、普段よく歌を詠む井口省吾師団長は次の一首を福島中将と藤波子爵に示すと、それが殿下や同乗者に示され、陛下へも届き、

名古屋から東京への宮廷列車に乗車し奉送→陛下は時々両殿下、諸官を逐次召され、御下問あり。

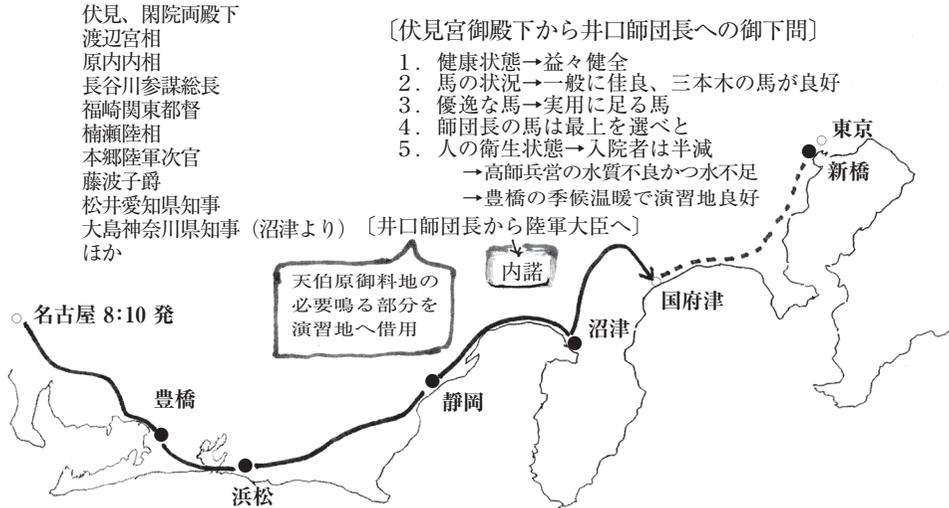


図13 大正2年11月18日の行動空間

陛下からは後日に揮毫して差出すよう御沙汰があり、それを奉呈することに感激し、聖恩を感じたとする。

その一首は、

「御いくさのむれに入ることほまれなり  
こたひのみかわ身の終りまで」

であると記している。

そんなこともあって陛下の玉車に呼ばれ、伏見宮殿下の待座する前でいくつかの下問があったとする。

まず健康について問われ、職務に支障ないと自覚していると奉答すると、次に馬の様子を問われ、不良馬を除きつつあり、改良中。とくに三本木の馬が優れていると奉答した。すると伏見宮から、師団に優逸な馬はあるか、また師団長の乗馬レベルも問われた。前者については特別な馬はいないが、実用には足ると奉答し、後者については田舎師団の田舎馬なので、時に失態すると昨日の名古屋での一幕を奉答すると、陛下は笑ってそんな事は他に幾らでもあると言われたと。

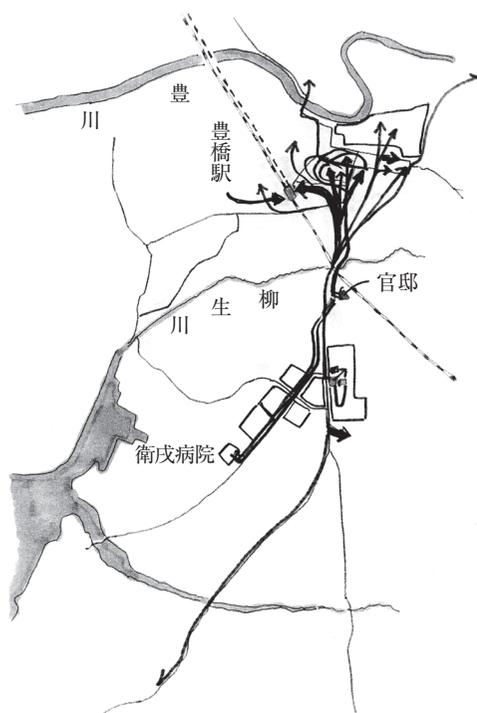
そのさい、陛下は明治39年の大学校参謀演

習旅行で病気だった自分が反動のある馬に乗れなかったことを覚えていていただいたのだとまた感動している。

ついで師団の衛生状態は良好で、入院者数も半減したこと、また高師兵営の水は不良ではないが量が十分ではないこと、受刑者数は変わらないが軍紀を厳しくした結果であること、豊橋は気候温暖で、年中の雨量も少なく、演習地も良好なこと、なのに軍隊教育の結果が伴っていないことを反省していること、また退役歩兵少佐大戸直則の在郷軍人会での功績大なことも伝えている。そしてもう一点、車中で楠瀬陸軍大臣らに天伯原御料地のうち必要部分を演習地に借用依頼をし、内諾を得ている。

そして国府津で下車し、夜半に帰宅している。

この宮廷列車への同乗は井口師団長にとってまぎれもなく光栄であり、高師師団の実情を伝え、また御料地の一部の借用を得るというメリットもあった。陛下や殿下との信頼関係が確保されたことがそれを可能にしたのだ



買物  
会議  
見物  
祭、行列  
病院  
会食  
見舞(火事も)  
案内  
見送り、出迎え  
面会

図14 師団長の市内での行動空間(抄)

ろう。

#### (5) 師団長の生活空間行動

以上、日記から各領域毎に師団長の動きを事例的に抽出して地図上に示してきたが、それをまとめて示すと図14のようになる。

ここでは軍隊の目的の移動は省き、日常的な行動のみに限定した。

それによると官邸からは衛戍病院でのもっぱら歯の治療を除けば、そのほとんどは豊橋の市街地への移動が多い。図中にも示したように、その移動目的は多様だが、生活上の移動目的はほとんど一般市民と同様だと思われる。ただし、会議は仕事としての会議に買物や見物が加わったりするため、少し特殊で行動範囲は広い。会食も同様で、色々な市内の団体からの招待も多く、それも会議目的と重なるケースがみられる。また豊橋駅へ見送りや出迎えをするケースも多く、それも仕事と非仕事が重なる。

それに対して買物は奥さんや子供との買回りが多く、市内の中心部を中心に曲線を描くようにあらわれる。

目的別に移動線を表現したかったが、複数目的の移動もあり、複雑化したので、線だけで示した点、わかりにくくなってしまった。

全体としては、当時、人口5万人あまりの都市規模であり、東海道を軸とした比較的単純な都市構造への対応が同じく単純な移動空間を形成していたとみることができる。

#### 5. おわりに

本稿は1912年11月27日から1915年1月25日の2年間あまり豊橋の陸軍第15師団長として在任した井口省吾が書き残した日記をもとに同師団長がどのように活動し、地元とかかわりをもったのかについてその移動空間を明らかにする点を中心に検討した。

在任中、毎日日記は欠かさず記されており、その中には師団の中だけの勤務や直接地元と

関係のない記録も多く、そこで記録の中から赴任と着任時をめぐる交流の移動空間、地元とのかかわりでみえる豊橋への視点、本務である訓練と演習の移動空間に絞って、それらが集約されている日記を抽出し検討した。

それをまとめると次のようになる。

(1) 井口省吾師団長は幼少期から明治維新直後の環境変化の中で、厳正な家庭環境と教環境に恵まれ、軍人の道をエリートとして歩んだ。陸軍士官学校や陸軍大学校で学び、教え、ドイツで学び、とりわけ日露戦争では厳しい戦争体験を乗り越え、帰国後は51歳で陸軍大学校校長となり、そのあと58歳で第15師団長として豊橋へ赴任してきた。教育、研究、実践の豊富な経験をふまえ、それを集大成し、指導力を発揮した形で臨んだといえる。したがって、基本理念の軍隊教育における国体維持思想をベースに、機敏な行軍力を養う教練の重視に加え、研究心を教育しようとする点に幅広い指導力があらわれていた。それは赴任直後の訓示（12月27日）からもわかる。

(2) 着任時は地元豊橋地域のみならず、第15師団が管轄する静岡、浜松での各連隊の視察もあり、東海地方全体への目配りもきちんと行い、各組織については単なる巡検に留らず、情報収集と適格な指導を行っている。

(3) 訓練はもっぱら第15師団の練兵場や高師原と天伯原の演習地で行なわれ、練兵場では個人の技量、演習地では組織的訓練が行なわれている。第15師団は騎兵に力点が置かれ、その訓練にも3騎兵連隊を中心に南部の広大な演習地が利用されている。

(4) より実践的な演習は師団外の一般民家のある農家、町、河川などをフィールドとして行なわれ、本稿では浜名湖北部、豊川下流域、西尾周辺などの事例を示した。

(5) そのような演習や巡検を利用し、各地の歴史的文化的施設や動物園を訪ねる行動もみられ、井口師団長の関心の幅広さがみられる。

(6) 地元豊橋との交流では師団側や地域の色々な組織が主催する会に出席しており、師団側主催の場合は、地域の指導者層が招待客として選ばれている。多くの場合、国会議員や市長、郡長、学校長などは必ず招待され、地域の指導者を重視していることがわかる。しかし、当時の豊橋の経済界がまだ十分でなく、経済界からの招待客は少ない点で、当時の豊橋（人口約5万人余）の状況が反映している。

また赴任当初の商業学校からの寄付依頼をめぐり、豊橋政界の党派的状況を知り、当初、政界へのアクセスは慎重であったことも、当時の豊橋政界の状況が反映している。

そんな中で個別的ではあるが、身体障害団体への寄付とか、神野新田への馬糞の提供など、地域との交流には留意していることもうかがわれ、在任中に市民との摩擦の記録はみられない。

(7) また当然であるが、師団長も日常生活での買物は夫人や子供と同行するケースが多く、そのほかの用件での私的な移動も多々みられる。その多くは軍の衛戍病院などを除けば、ほとんどが豊橋市街地へ出かけており、それなりに市民との交流もあったように思われる。

以上、井口師団長の豊橋在任中の日記からうかがわれる行動空間を追った。目的によりその空間は官邸、師団指令部、練兵場、演習場という師団空間が大半で、買物や会合などは豊橋市街地が主、野外演習や他の連隊への巡検、視察がほぼ東海地域の枠内で展開したことがわかる。師団という軍隊組織ではあるが、師団長の才量で地元との交流も図られていたことも知られた。

ところで井口省吾のいわば豊橋日記は詳細であり、今回は筆者の関心事で若干の記録を簡単にまとめたにすぎない。そのため、より全体のデータから総体をみる工夫も必要であり、また前任地である陸軍大学校時代との比

較も興味深いように思われる。

### <謝辞>

本稿の作成には、日記を提供いただいた井口省吾の出身地の井口賢明会長や不破久温氏はじめ「上石田を語る会」の方々にお世話になった。ここに謝意を表したい。

### [注]

- (1) 近衛篤磨日記刊行会(1968～1969)『近衛篤磨日記』、全5巻+付属文書巻、鹿島出版会
- (2) 沼津市「上石田を語る会」、進行中
- (3) 日本政治外交史研究会(1989)『《井口省吾文書》及び解題(一) — 日露戦争期の書簡と日記を中心として —』、慶応大学法学研究、62巻-1号、P.P.83-113
- (4) 日本政治外交史研究会(1989)『《井口省吾文書》及び解題(二) — 日露戦争期の書簡と日記を中心として —』、慶応大学法学研究、62巻第2号、P.P.62-104
- (5) 飯島明子(2000)「ドイツ留学時代の井口省吾」、軍事史学、36-2、P.P.70-85
- (6) 波多野勝編(2002)『井口省吾伝』、現代資料出版、245P.
- (7) 沼津市誌編纂委員会(1958)『沼津市誌』下巻、P.P.16-43
- (8) のちに博文館から井口省吾の幼少時代についての質問に次のように答えている。
  - ①初めて面白いと思った書籍、雑誌は→膝栗毛
  - ②初めて面会して面白いと思った人は→奈良の大仏
  - ③初めは何になりたかったか→人に生まれたから、他にはなりたくなかった。
  - ④初めて行って面白いと思ったところは→高い山
  - ⑤初めて叱られたり、ほめられたりしたことは→何もしなかったのどちらでもない
- (9) 前掲(6) P.16
- (10) 前掲(5)
- (11) 前掲(6)
- (12) 前掲(6) P.215
- (13) 前掲(6) P.216
- (14) 前掲(6) P.P.117～118
- (15) 藤田佳久(2015)『愛知大学公館100年物語—旧陸軍第15師団長官舎から「知のサロン」へ—』、愛知大学東亜同文書院記念センター刊、あるむ発行 55P.
- (16) 藤田佳久(2016)「軍都豊橋と旧陸軍第15師団長官舎」、同文書院記念報(愛知大学)、vol.24、P.P.207～237
- (17) 佃隆一郎(2014)「東海軍都論—豊橋と、関係して名古屋・浜松」、『地域の中の軍隊3・中部』所収、吉川弘文館、P.P.8～37
- (18) 前掲(16)
- (19) 前掲(3)、(4)
- (20) 前掲(5)
- (21) 前掲(6)
- (22) 豊橋商工会議所五十年史編纂委員会(19 )『豊橋商工会議所五十年史』、同所刊、P.P.579～580
- (23) 豊橋の史跡と文化財編集委員会(1981)『豊橋の史跡と文化財』、豊橋市教育委員会刊、P.P.62～63

